

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心

No.546

過ちを指摘し、叱責する賢者に会ったら、宝のありかを告げる人のように交わるべきである。（釈迦）

△解説▽世にはあら探しや意地悪な叱り方をする人がいる。麦踏みは麦の成長を願っての行為で、それと同じように、考え方や生き方を正すのを願って、過失を教え、叱責する人には従うことである。指摘や叱責をいやがる人は、己の姿を見失うだろう。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.16 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.545

恥を恥とも思わず、人に嫌われながら「俺は君の友だ」と言っておも、少しも善いことをしない人を、「己の友人」と思ってはならない。（シャータカ）

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.14 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.548

人が近付いて来たとしても、高ぶる心をもたず、また、己から離れて行ったとしても怨んではならない。（『阿毘達磨』）

△解説▽「ようこそー」の挨拶語は歓迎の気持ちを表す。古い仏典にも同義のスワーカタムという語がある。古来、これは人の心を開く言葉として使われてきた。去って行く人には「またおいでー」と呼び掛ける。このように心と心と挨拶を心掛けたらいい。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.17 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.547

人は愚者から遠ざかるべきである。もし出会ったら愛をもって彼を宥めよ。ただし親交を結ばず、無関心な聖者の振る舞いに倣え。（『入菩薩行論』）

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.16 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心

No.550

愛憎違順することは、高峯岳山に
とならず。 （『正像未相識』）

△解説▽仏教用語の愛は情欲のこと。情欲と怨憎は表裏の関係で、情欲が強ければ、裏では怨憎が増えている。たとえば命懸けの恋が裏切られると、怨み憎しみが燃え盛り、刃傷沙汰となる。情欲と怨憎は、あざなう縄のようでもある。連山の峰のようでもある。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.19 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

No.549

おごりは長ずべからず。欲はほしいままにすべからず。志は満たすべからず。楽しみは極むべからず。 （『礼記』）

△解説▽言動はすぎではならないと聖人・賢者は共通して説く。おごりはなくすべく、欲の赴くままにしてはならない。志は満たされないとこころがあればこそ、別の志が立つ。満たされると人は自信過剰となるからである。楽しみは極めるとあとにわびしさが残る。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.18 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

No.552

満足させがたい人とは。ひとりほ得た物を次々と蓄える人。もうひとりほ得た物を次々と捨てる人。 （『釈迦』）

△解説▽守銭奴といわれる人はいくら金があっても満足しない。財産家はさらに財産を増やそうとし、満足しない。また、手に入れても新しい物を求め、すぐに捨てる人がいる。彼にも満足感がない。物への妄執が人を苦しめる。妄執を離れ、施す心を持つには心が安らぐと教えた。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.21 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

No.551

得がたい人とは。ひとりほ先に恩を施す人であり、もうひとりほ恩に感じて恩を知る人である。 （『釈迦』）

△解説▽木陰に臥す者は枝を手折らずとは木陰の恩を知っているから折らないことをいう。世は寄り合い所帯で、だれでも陰に陽に恩を受けている。つねに恩に感じ、恩を知り、そして報恩を忘れてはならない。木陰にいて枝を折るなど以ての外。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.20 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村元 慈しみの心

No.554

善き指導者には好き嫌いの心がない。あたかも大海があらゆる河川の流れを呑みこんで、同一の塩味とするように、平等にして無私である。

〔華嚴經〕

△解説▽心が広い、勝れた指導者は、己の好き嫌いで学ぶ相手を差別しない。大海が多くの河川の水を受け入れて、一味（塩味）とするように、相手の生まれや身分などを見ないで、慈しみの心で接し、平等に教導する。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.21 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.553

およそ生来の聖者はいない。ゆえに人はさとりを得るまではお経や善い指導者にしたがって道を学ぶのである。

〔道元〕

△解説▽「仏もむかしは凡夫なり」という江戸川柳がある。仏と呼ばれた人たちは世の理法にしたがって人の道を歩んできた。生まれた時から仏ではなかった。発心して勝れた人格者になりたいと思えば、誠実な指導者に就いて道を学ぶことである。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.21 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.556

庭に生るちりちり草の露までも、影をほそめて宿る月かな。〔三言安杖〕

△解説▽月の表情に新月、満月、三日月、半月とあるが、月はつねに円く、輝いている。朝露、池、海に映る月影の大きさは違うが、天空の月と同じもの。諸仏も変身して生類の内外から見守り、正道を歩むように願っているという。観音菩薩は典型的な権化した仏である。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.21 中村元記念館協力

中村元 慈しみの心

No.555

弟子は良質の材木のようなものであり、指導者は大工のようなものである。良質の材木でも巧みな大工の手にかからなければ、よい材質が現れない。

〔道元〕

△解説▽人の素質に優劣はあるが、優れた素質を最高に發揮させ、劣った素質でも十分に活かすように導くのがよい指導者。なぜならよい指導者は、人の能力と素質を見抜く目を持ち、人の素質を無限に育てる知恵を得ているからである。

田上太秀・駒澤大名誉教授

2017.5.21 中村元記念館協力